

## 同じ土俵に立って

本日は聖霊降臨日です。先週まで復活節第〇主日という数え方をしていましたが、今週からは聖霊降臨節第一主日という数え方をするか、三位一体主日という数え方をしていきます。これは聖霊が降ったことにより、父・子・聖霊なる神のみつつの働きが揃ったという理解にもとづく時の数え方です。父なる神が創造と保持（恵みのご支配によって保つ働き）、子なるキリストが救済の働き、十字架と復活によって罪の赦しと和解の福音を示してくださった、そして聖霊なる神が今も働いてわたしたちの弁護者となり、御業を現してゆかれる。「誰も聖霊によらなければイエスを主と告白することはできません」というパウロの言葉がありますように、わたしたちがキリストに繋がれたのも、いま読み進めているフィリピに信徒の群れが誕生したのもこれはすべて聖霊なる神の働きによるものです。父なる神と子なるキリストと聖霊なる神のご支配のもとにあるのがキリスト者の歩みであることを確認しておきたいと思います。そのうえで、今朝、わたしたちに与えられているフィリピの信徒への手紙から、わたしたちの立つ場所、事柄を始める場所がどこかを一緒に確認したいと願います。

さて、この手紙もいよいよ終わりに近づきましたが、ここに至ってパウロは気にかけていたことを慎重に取り上げています。二人の婦人の名前を具体的にあげて、主において同じ思いを抱きなさいと勧め、周囲の人々にも真実の協力者よと呼びかけ、彼女たちを支えるように勧めるのです。また続けて「主において常に喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい」と命じます。大切なのは繰り返される「主において」です。キリスト・イエスの内であって、ということです。わたしたちの立つ場所はこ

こだ。自分の内ではなく、自分の外、つまりキリストの内に軸足を移しなさい、そこにわたしたちが喜ぶことの出来る根拠がある。パウロはそう勧めるのです。わたしのイメージとしては、「主において」というその場所には井戸がある。信仰という釣瓶でキリストという尽きることのない命の泉からわたしたちは福音という喜びを汲み上げる。その手助けをすることが真実の協力者の果たすべき役割なのだと思わされます。エボディアとシンティケというふたりの婦人の名前が挙げられていますが、さきに出てきたエパフロディトがこの二人の婦人の何らかの諍いをパウロに伝えたのでしょう。いまとなってはどのような諍いであったのか、これらの婦人がどういう人となりだったのかまったく分かりません。当事者であったフィリピの人達にしかわからない。しかし逆にいえばエボディアとシンティケという名前の挙げられているふたりはある種、記号のようなもので、そこに誰の名前を入れても良い、わたしの名前でも、他の誰でも良い。人間の集まりのあるところ、誤解や無理解、熱心であるからこそその衝突などいろいろなケースが考えられるからです。それは教会といえども同じです。むかし、むかしある教会員の方と話していたら、もうどういう文脈だったが忘れてしまいましたが、やはり人間関係で何か苦労されることがあったのか、ぽつりと、教会の人はみないい人なのに、と呟いたことがあり、いい人だけどみな罪人ですよ、と返したら、ああ、と憑き物が落ちたような表情をされたことがありました。わたしがこの箇所のパウロから牧会者として見習うべきだと思うことのひとつは事柄の是非を論じていないことです。双方の言い分を聞いて裁判官の立場に立つのではなく、一緒に主イエスのもとに立ちましょと勧めていることです。彼自身は牢獄にいて出向けませんので、まずエボディアとシンティケに向けて、「主イエスに

において同じ思いになるように」と勧め、つぎに真実の協力者と彼が言うところのフィリピの仲間たちに支えとなってくれるように依頼するのです。そのように主において一致することが出来るならば、そこにキリスト者ならでの「広い心」を示すことが出来るだろう。それが世に対する証となることを知っているのです。さきほどわたしは「いい人だけど罪人だから」と言いましたね。誤解をするといけませんので言葉を足しますが、聖書でいう罪人とは神の言葉に聴かない人のことです。御言葉に対する不服従の結果、さまざまな見当違いや諍いが起きる。このことを最初に取り上げたのは創世記3章の失樂園ですが、取って食べるなど神さまが命じた善悪の知識の木の実を食べた結果、目が開け、人は善悪を知る者となったとされます。神に善悪を求めるのではなく、人間が神のように自分で善悪を判断することによって混乱が地に満ちたと聖書は語るのです。自己中心的な人間がそれぞれの正しさに生き始めた結果がわたしたちの社会の有様です。善悪の戦いではなく、互いに善を主張する者同士の戦いなのです。悪とは相手にはりつけるレッテルにすぎません。それは国と国の争いであったり、企業と市民団体の追求する利益の違いであったり、エボディアとシンティケの場合のような個人レベルのものまで、互いに自分の主張をぶつけあうことはどこにでもあることです。声の大きいほうが相手を黙らせるのか、無理を通せば道理が引っ込むのか、長いものに巻かれるのか、相手を抹殺して黙らせるのか。ローマ人は墓場をつくってそこを平和と呼ぶという言葉もパウロの時代にはあるくらいです。先程の創世記でいえば、善悪の知識の木の実を食べた人間は神の顔を避けて園の木の間に隠れ、互いに背きの罪をなすりつけあう状態になってしまいました。その後はノアの洪水による創造のリセット、しかし更にノアの子孫が増え

た先も行きつく所はバベルの塔を建設して神に至ろう。有名になろうという試みであり、神はそれをご覧になって降り、彼らの言葉を乱した（バラル）ので、そこはバベルと呼ばれるようになったと言われるのです。人は自分を世界の中心に置いて、高くなろうとし、神のように他者を裁くことによって自分の正しさを示そうとする。それがわたしたちの社会を分裂させてゆく。ただひとりの善い方に聴いて生きることをしない人間の見当違いを罪と聖書は呼びます。このためにキリストがわたしたちのところに降られたのです。「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです」という執り成しをして十字架で死なれるためです。この執り成しの死によって、わたしたちの背きの罪は拭われ、聖霊によってキリストと結び付けられることによって、わたしたちは主イエスを通して神を父と呼ぶことが許され、この方とともに生きることが許された。調和と一致に生きる道を示された。この父なる神のいます世界に、パウロはフィリピの信徒たちを招いたのです。主に結ばれているということをパウロは手紙の最初から強調していました。このことが民族の違いや、性別の違いや、自由人や奴隷といった身分の違いを超えた主にある兄弟姉妹として生きることを可能にしたのです。それはすべて彼らが負っていた属性を捨てて、主イエスに結ばれたこと、キリスト者という新しく与えられた名前のもとで生きることを神に招かれて選択したからです。恵みに応答したのです。その結果、パウロはかつての自分を誇らせていたすべてのものを捨ててしまいました。ユダヤ人であること、ベニヤミン族の一員であったこと、ファリサイ派であり、律法の面では非の打ち所がなかったことなどユダヤ社会においては超エリートであった事柄を主イエス・キリストにおいて示された神の御心を知ることのあまりの素晴らしさに塵芥のよう

に思い、捨ててしまったのです。これはまさにパウロがエボディアとシンティケに勧めているように、主において約束されたことの素晴らしさを認めたからにほかなりません。自分でお手盛りに自分を褒めたり、相手を蹴落としたり、あげつらったりして自分を高くする必要はないのです。神の前に自分の正しさで立てる人間がいるでしょうか。そのように裁きあって滅びるしかないわたしたちを憐れんで神はイエス様をキリストとして送ってくださったのですし、神さまとイエスさまから、わたしたちを主において一つにするために、調和と一致を表すために聖霊が降ったのです。そして、教会が生まれたのです。だから、パウロはエボディアとシンティケに対して、事柄の是非を論じ合うのではなく、議論の前提となる立場を人間の思いではなく、主イエス・キリストが招いて下さった場所に、つまり十字架のもとに立たせるのです。そこであなたがたは優劣を競うことから解放される。むしろ、そこで至らないわたしのためにキリストがへりくだって仕える者となられ、ついには命まで下さったことを知らされる。それをエボディアとシンティケがともに知ることが大切なのであり、それを可能にするために真実の協力者たちの手助けが、祈りが必要なのです。同じ土俵に、主イエス・キリストの御前に彼らは共に進み出るのです。それは今日の日でいうならば和解の食卓である聖餐の場と言ってもよい。罪赦された者として生きる。キリストに願われたものとして生きるという共通の土台の上に立って互いのことを考えること、配慮すること、そこに主に召し集められた者たちの集まりである教会の土台が据えられているのです。パウロは2章2節でも「同じ思いとなり、同じ愛を抱き、心を合わせ、思いを一つにして、わたしの喜びを満たしてください」と語っていました。手紙の最後に応用問題のように、これはエボディアとシンティ

ケ、あなたがたのことですよ、皆さんもよいですね、彼女たちを支えるのですよ、と念を押すのです。それがパウロの喜びとなり、主イエスの和解の働きの素晴らしさを証して彼ら自身の喜びともなることをパウロは知っていた。仲直り、和解によって、人々の集まりに調和と一致が回復されることにまさって喜ばしいことはないからです。最後に、パウロの勧めの言葉の結びの部分をもう一度よみあげます。

「主において常に喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい。あなたがたの広い心がすべての人に知られるようになさい。主はすぐ近くにおられます。どんなことでも、思い煩うのは止めなさい。何事につけ、感謝と祈りと願いをささげ、求めているものを神に打ち明けなさい。そうすれば、あらゆる人智を超える神の平安が、あなたがたの心と考えとをキリスト・イエスによって守るでしょう。」

お祈りいたします。